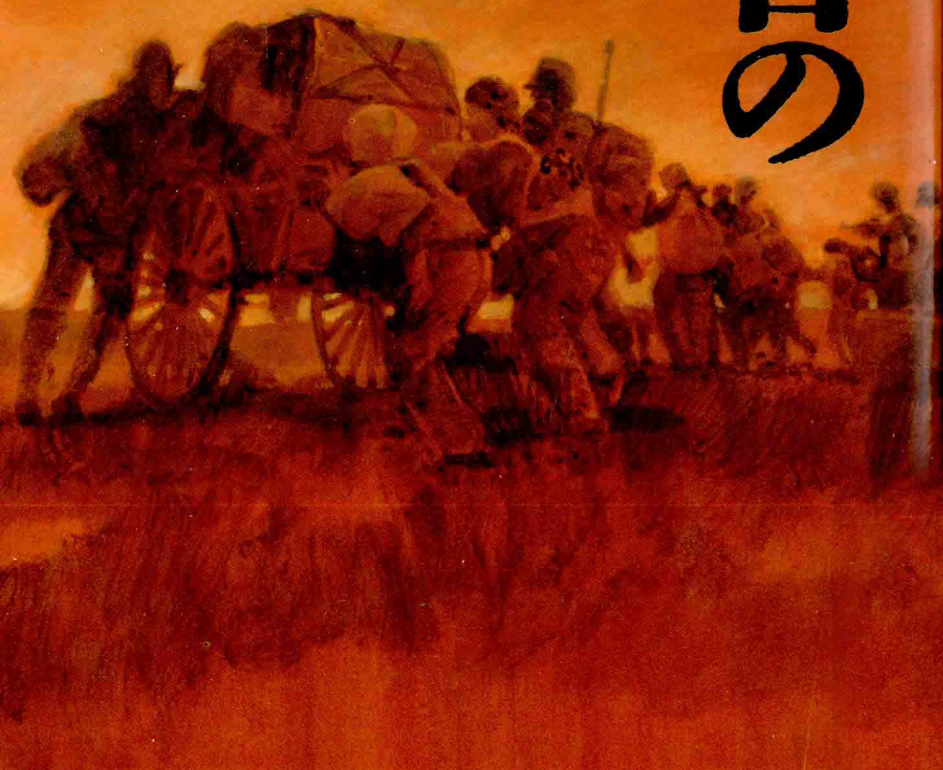
赤い夕日の大地で

良永勢伊子



良永勢伊子

赤い夕日の大地で

赤い夕日の大地で　定価一、一〇〇円

著　者――良永勢伊子　山田トキヨ
宇佐美百合子　藤野昭子
山内チヨ子

編集人――谷亀利一
発行人――堀内　稔
発行所――読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇
大阪市北区野崎町八の一〇　〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一一　〒八〇二

印刷所――大日本印刷株式会社
製本所――ナショナル製本
第一刷――昭和六十一年十二月十四日
第四刷――昭和六十二年一月十四日

ISBN4-643-74680-7 C0095
© 1986, Yomiuri Shimbun-sha
落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

第七回読売「女性ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞
カネボウ スペシャル入賞作品集「赤い夕日の大地で」 目次

優秀賞 赤い夕日の大地で 良永勢伊子 5
入賞 ヒデちゃん高校へ行く 山田トキヨ 69
入選 二つの心 宇佐美百合子 133
入選 母と子に席をください 藤野昭子 185
入選 長い道 山内チヨ子 243
選後評 三好徹 297
選考経過 300

装丁　多田　進
装画　武井明夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

赤い夕日の大地で

第七回読売「女性ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞
カネボウ スペシャル
入賞作品集

優秀賞

赤い夕日の大地で

良永勢伊子（よしながせいこ）

よしなが・せいこ　昭和六年四月五日生まれ。福岡県出身。福岡外事専門学校卒。アメリカ・グッドイヤータイヤ、日本電信電話公社に勤務の後、昭和三十二年シナリオ作家片岡薫氏に師事。主婦。
昭和五十四年三修社より「主婦の見たもうひとつのドイツ」を出版。
現住所　東京都府中市美好町三の五〇の二一

ブラウン管の衝撃

黄・茶・赤と見事な色に変身した武蔵野の木立ちも、情ない遣らずの雨で一夜にして枝ばかりを残す頃であった。深大寺に近い山本家の外国ふうの瀟洒な家の居間では、娘の動かす掃除機の音に混って、テレビからは朝の連続小説のテーマ音楽が流れていた。この時間に芳子はゆったりとガウンに身を包んで、風呂場へ向かい、まず長い長い朝風呂を浴びることから一日がはじまる。

彼女はこの習慣を神経痛のせいだと家族には言っているが、本当は背中に残る古傷が年とともに痛みだしたのである。私はこのところ何度か彼女に誘われて温泉へ行くようになったが、彼女の背中を見てギョッとした。火傷のような、切り傷のような跡が背中から右腕にかけて斜めに走っており、そのあまりの痛ましさにそっと目を外らすほどであった。

芳子は入浴が終わると断髪にした髪を軽くなで、化粧をしてひとり朝日のさし込む部屋に、パンとコーヒーを運び、食事をしながらテレビを楽しむのである。この頃はすでに掃除を終えた娘が、父親とともに彼の持つ工務店へ出勤したあとであり、雑音一つしない静かな部屋で午前中はゆっくりとくつろぐのである。

この一見自由で悠々自適の暮らしに見える彼女も、この日ばかりは、平和な幸せに浸る暇はなかった。ふと回したテレビの番組で大変なことを報じはじめたのである。

「……本日は、先般来肉親探しのためにやってまいりました中国残留孤児の手がかりを求める声とともに、視聴者へのお願いを放送いたします。敗戦後の旧満州（中国北東部）に置き去りにされた孤児は、二

千人以上に及ぶそうです、今回は黒竜江省から四十五人、遼寧省から四十五人、合わせて九十人が来日して肉親を探しています。どうか孤児たちの声に耳を傾け、心当たりのあるかたは名乗り出てください。また、どんな小さな手がかりでも、かすかな記憶でも結構です。よろしくご協力のほど、お願いいたします」

と、若い男のアナウンサーが前置きすると、代わって人民服の質素な身装りの男性がマイクに向かった。彼は、

「みなさん！……」

と第一声を呼びかけたとたんに泣きはじめた。この孤児は、奉天（瀋陽）の収容所で中国人の回収業者に引き取られたと言い、そのとき、親が形見にくれた皮財布を見せ、

「親よ、まだ生きているなら会いに来てください！」

と、心から叫んだ。芳子は最後まで聞き続けられる心境ではなかった。この数年、孤児問題がクローズアップされてからというものは、戦後の満州が思い出され、自らの手で娘を捨てた日のことが忘れられず、ひとり秘かに念仏を唱えていたほどであった。

〝ブツリ〟とテレビのスイッチを消し、心の動揺を押えた芳子ではあったが、なぜか胸さわぎがしてならなかった。今回の孤児たちは、彼女にとって故郷ともいえる黒竜江省と、引き揚げ途中やむなく娘を捨てた遼寧省からの孤児たちだからである。芳子はまるで恐いものでも見るような思いで、再びテレビをつけてみた。ちょうど放送は男性から女性へ変わるところで、白いトックリ衿を上着の下から覗かせた四十歳ぐらいの人が一礼すると、しっかりとした口調で話しはじめた。

「……皆さん、私は孫美華（仮名）と言います、親と別れたとき幼かったせいか、年齢も日本名も覚えていません。ただ分かっていることは、この大きな布に包まれて、新京（長春）から四平へ向かう列車から捨てられたということだけです。私は親がなぜ捨てたのかそれが知りたい！　決してご迷惑はかけませ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

んから、どうか名乗り出てください！」

あとは胸を詰まらせ、言葉にならなかった。その代わりか、机の上に置いていた唐草模様のふろしきを立ち上がって展げて見せた。芳子は夢を見ているのではなかろうかと思った。と同時に、脳天を木刀で一撃されたような衝撃を覚えた。それはまさしく、彼女の手づくりの四枚継ぎ合わせた特製のふろしきだったからである。

孫美華はふろしきを片手になにやらまた訴えていたが、体中の血が頭にのぼってしまった芳子の耳に入るわけがなく、ただブラウン管に映し出される文字を呆然と眺めているだけであった。ほんとうにあの娘だろうか？　いえまさか……でも、もしかしたら生きていたのかもしれないと、芳子の頭の中では否定する気持ちと肯定する気持ちとが入り乱れた。その彼女にふとあの日の記憶が甦った。

それは昭和二十年、九月十五日の夜であった。

興安を出てひと月以上の逃避行を続けてきた芳子は、新京まで南下すると、ようやく収容所で落ち着くことができた。だが生徒数四百人程度の小学校に千人以上の親子連れが入れられたのだから、手足を伸ばして眠ることもできず、座ったまま仮眠をとる状態であった。そしてこれら難民のほとんどがソ連の攻撃にあうか、または中国人の反逆に肉親を殺されるか、あるいは自害した人の家族ばかりで、人は血みどろの地獄を抜け、修羅場をのがれて集まっていた。その精神的ショックにかてて加えて、長い逃避行の疲労と飢えと伝染病にあえぎ、明日への希望もまた帰国の夢もなくし、親たちは愛しいわが子さえも食糧と交換して命を繋ぐほどの極限状態のなかにあった。

そのようななかで、芳子は思いがけなくソ連兵に食糧を貰った。この日から彼女は多くの人の反感を買うことになり、羨望と中傷に不名誉な噂を立てられ、いつしか白い眼で見られる存在となっていた。折りから突然一部の人々の四平移送が決まったのである。

子供を手放した親たちは、いつまでも残したがる親には冷淡で邪魔者扱いをし、もし万一子供のために大人の命が危険にさらされる場合は、親の手で始末しろと命じたのである。その人は、四平へ送られる者のなかでは長老格で、誰が決めるともなく自ら引率者となった人であった。芳子は彼に恐れをなすと、春子の頭から体にかけてすっぽりと毛布でくるみ、その上からさらにふろしきで覆って背負った。泣き声が聞こえないように気づかったのである。

列車はプーンと家畜の匂いがする無蓋車であった。荒れすさんだ難民は子持ちだからと優先する気持ちなどなく、突き飛ばすようにして我れ先にと乗り込んだ。側には子供を売っていけとうるさくつきまとう中国人がいる。そんな男たちからのがれるためにも早く乗り込みたいと気は焦るのだが、ようやくデッキに上がった体は幾度か引き落とされ、かよわい女は押しのけられるばかりであった。すでに列車はすし詰めどころか重なり合って乗っている。もしかしたら乗れずに収容所へ逆戻りさせられるのではないかと思うと、芳子は無我夢中でステップに一段飛び乗った。体はまだ全部乗りきれず十五度ぐらい傾いている。

〃ゴトン〃と、列車は予告もなく動いた。だがしかし、体を両腕に託してぶら下がった芳子の手は、時が経つにつれてしだいに無感覚になり、細い腕はちぎれんばかりであった。その上、列車は十分走っては十分停まるといったのろのろ運転で、この状態が二時間も続くと人々は動揺しはじめた。

「いけねえー　これでは〃匪賊〃が追ってくるぞ」

「みんな声を出すな！　覚られたら最後だよ」

と、車中の人々は言い合った。だが芳子は、春子にかぎって声を出すような子ではないという自信を持っていた。長い逃避行中、いかに恐ろしいことに遭遇しようとも、けっして泣かない子だったからである。それに頭から毛布で覆っている。たとえ泣いたとしても、聞こえるはずがないと信じこんでいた。その子が息苦しかったためか、皮肉にも泣きだしてしまったのである。

「捨てろ！」
「殺すのだ！」
と、殺気立つ声が闇のなかを飛んだ。
芳子は恐いその声に負けてひらりと地面に下りた。するとなぜか列車も速度を落としながら停まった。見ると側には綿入れのような服を着た中国人が、鞭を鳴らしながら列車に近づいていたのである。彼らは威嚇しながら追って来たが、列車に乗り込むなり難民のトランクや貴重品を取り上げ、少しでも抵抗しようものなら、容赦なく引きずり下ろして殴りつけた。この責任を芳子が問われたとしても無理はなかった。芳子がデッキにぶら下がっていると、人々は二度と泣かすなと非難し、誰に断って乗っているのかと詰った。
芳子はしばし黙殺した。夜明けには四平に着くだろう。それまで聞こえないふりをするのだと自分に言い聞かせながら、じっと辛抱して乗っていた。ところが、しばらくすると再び春子が泣き、またも同じ災難を繰り返してしまったのである。しかも今度は引率者であった長老が、彼ら〝匪賊〟に楯突いたために殺されてしまったのである。
「あんた覚えてないのか！　子供のために、大人の命が脅かされるときは即刻殺せという命令だったろう！　なぜ殺さないのだ！　しかも人が死んだんだよ。団長が殺されたんだよ！」
と、非難を浴びると、芳子はもう目を瞑っているわけにはいかなかった。列車が動きだすと秘かに場所を選び、飛び下り自殺をする覚悟であった。
やがて広漠たる原野を過ぎると河にさしかかった。ここだと肚を決めた芳子は、黒く流れる大河を見下ろした。そのときのことである。突然力強い男の手が芳子を引き上げると、自分の場所を譲った。
「死んじゃいかん！　生きられるところまで生きるんだ！　早まるなよ！」
と、叱りつけ、勝手に春子を芳子の背中から下ろしはじめた。すると彼の連れあいらしい四十前後の

女性が、
「この子には悪いけど、多くの人が子供を捨ててるときだもの、あたしらの村ではすでに家を離れるとき始末してきたのよ。あんたもここまで苦労して連れてきたろうけど」
と、慰めなのか言い含めているつもりなのか、男に協力して毛布を取り、ふろしきをいったん展げるとまるで荷物でも包むように春子を中に入れて四隅を結び合わせ、ほんの少しの隙間から顔を出し、捨てるのは親の手でとばかりに無言で渡した。悲しみは涙となって溢れた。春子は自分の運命を分かってか分からずか、芳子の顔を見ると、
「ママ！」
と全力を振り絞って叫んだ。芳子は狂い泣きして頬ずりし、無言の別れを心の中で告げると、またデッキに下り立ち草むらの中に葬った。
「ギャッ」
と春子は動物のような声を残して別れていった。あれから四十年、いまだに子供の泣き声を聞くと、あのときのことが思い出されて、うなされる夜もある芳子であった。

彼女はひとり昔を回想すると、思いきって厚生省の引揚援護局へ電話をした。番号は放送の終わりに知らされたものである。
「おそれいりますが、孫美華さんについてもう少し詳しい資料はないのでしょうか？」
「詳しくですか？　たとえばどのように？」
「何月何日、どのあたりで拾われたとか、どうして生きていたか、誰が拾ったかなど……」
「それが分かる人は少ないでしょうね。今回来日した孤児たちは、幼児のうちに親と別れていますからね。しかしあなたは、もしかするとおかあさんではありませんか？　そうでしょう？　いまどこにいま

すか、お住いはどこですか？　どうかこちらへお出でください！」
相手の声はとたんにはずみ、色めきたつ雰囲気が感じられた。芳子はあわてて電話を切った。うっかり口にしようものなら、さっそく写真入りで新聞に載ることだろう。そのとき、自分の立場はどうなる？　やっと築いた幸せが一瞬にして崩壊するではないか。これぱかりは一生の秘密にしておくのだと決心したのだが、ふとそのとき、相談にのってくれそうな頼もしい人物の顔が浮かんだ。
その人というのが、じつは私である。

重大な話がある、調布駅南口の噴水のところに来てほしいと電話がかかってきたのは、十一月二十九日の午後であった。
そもそも私と山本芳子（仮名）の関係は、はるか三十年前、職場をともにした同僚である。私どもは戦後福岡のあるアメリカ系の会社に就職したが、彼女は私より前に入社していた先輩タイピストで、学校出たての新参と違って、仕事もよくできるが英会話は抜群で、しかも人生の酸いも甘いも知りつくしたような三十代の人であった。だがなぜか暗く、仕事以外は貝殻のように口を閉ざし、笑うこともなく、もし私がミスでもしようものなら、物を投げつけ火のようになって怒鳴りちらす恐い女性であった。
その彼女と再び東京でめぐり会ったのは、息子の中学のＰＴＡでのことである。私は聞き覚えのあるカン高い声に呼び止められて驚いた。すでに記憶のなかから消えかけた存在の芳子と意外なところで会うことになったからである。
「これがご縁というものでしょうね」
という彼女は、私と同じ年に上京し隣市に住む建築業者・山本大三氏（仮名）と再婚し、先妻の子三人の母親に収まっていた。そして歳月は人を変えたのか、明かるく活発な人となり、学校の役員など人のいやがる役を進んで引き受け、会合のあとなどきまって食事に誘い、女同士の打ち明け話までするほど

になっていた。長電話もよくした。昨日も三十歳を過ぎた娘の縁談がようやくまとまったと、喜んで二時間も話したのに、まだつけたすことがあるのかと思いながらも、呼び出されるまま約束の場所へ向かった。

「大変なことになったの、卒倒しないで聞いてね……」

と、まず私に心の準備を与えて打ち明けはじめた芳子は、さすがに口も重く、訥々と娘を大陸に捨てて帰国したことをさらけ出した。

私は、彼女が引揚者であったことをいまのいままで知らなかった。よくもこのような過去を何十年も黙っていられたものだ。もし私なら、秘密をひとりでしまっておく苦しさに耐えきれず、信頼のおける人に懺悔しないではいられないのだが、人に語るにはあまりにも哀しい悲劇だからであろうか、芳子は満州の満の字も口にしたことはなかった。

「どうりで、昔のあなたはネクラだったわ」

「いまはそれが問題じゃないのよ。あなたに来て貰ったのはお願いがあるからなの。あの娘、孫美華に会ってきてくれないかしら？」

「え？　私が？　ご自分で行きなさいよ」

「それが行けるほどなら頼みなどしないわよ。お願いよ、あの人のことを調べてきてくれない？」

芳子が私にこのようなことを頼むのは、じつは複雑な事情があるからである。彼女は山本氏と再婚するとき、満州で二人の子供を持ったことは話したのだが、さすがに一人は捨てたと言いかね、二人とも引き揚げ途中病死したことにしてしまったのである。

ふだんの私なら、人の頼みとあっては二つ返事で承知するところだが、今度ばかりは少しためらった。中国語を喋れぬ私がどうして役に立つだろう。それに初対面の孤児にどこで拾われたかだの、どうして生きていたのかなど、これほど聞きにくいことはないように思えるのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com